上紀子先生へのインタビュー

英語英米文学合同研究室院生

合研：昨年から英語英米文学専攻の教授方にインタビューをする企画を始めた。第一回目は，グローバル化の波によって若い世代が何を学ぶにも外国語ことにコンピューター用語でもある英語の習得はマストになっている現在，私費公費を問わず留学の歴史を振り返り，実際の体験をお伺いし，日本人にとって留学はするものだけでなく，今や留学生を受け入れる側になっていることを確認した。今回は，多くの留学生を送り出した日本に関心を戻し，二十一世紀の現状を踏まえながらインタビューを進めて行きたい。

その現状とは，明治維新以来有為の人と言えば留学経験者と言われ，ただ箔を付ける為だけにも男子たるもの遊学をし，商社・銀行国際部・外務省に職を得ることは，公費自費留学の資金を得られぬ者の方策としても人気があった。又，第二次世界大戦以後の経済成長の円高の結果によって子女を留学させることが経済的に容易となり，子女教育の一端或いは国内有名校進学のもう一つの道であり避難所と呼ばれるまでに高まった海外留学熱が，このところ特に新世紀に入って以来鎮まっており，回復の気配さえ見られないことである。これをマスコミなどでは日本の若者の「内向き志向」と呼んでいる。しかし，こうした「内向き志向」は確かにかつて英国病とかフランス病と言われた先進国の若者や，生活を変えたがらない一部の女性の間にも見られたので，豊かになれば移動を拒むのは当然かもしれない。また，如何に1ドル90円台の円高と言えど，国内経済はバブル崩壊以来20年間続く低成長下にあるとすれば，親も若い世代自身も思い切っ

て留学の出費を決断するわけには行かない事情もある。

一方で，かつての近代型留学がヨーロッパ語圏を目指したのに対して，これから志向すべきは必ずしも欧米諸国ではないと言う問題点もある。日本の輸出額が米国を抜いて対中国が最大になったことが示すように，留学も古の遣唐使のようにアジアを目指さなければならない。その時には如何に中国の経済的発展が驚異的なものとはいっても，生活の便宜や安全面では留学は，かつての欧米人が冒険と称したような気持ちで大陸に渡らなければならない。勿論，仏教伝来から1840年の阿片戦争敗北以前の中国への憧憬の念を伝えられた家庭で育った者にとっては，それほど難しいものではないであろう。しかし多くの日本人は近代において，中国やアジアを留学の対象としては来なかった。観光の対象とし始めたのも，欧米のリゾート観を学び円高が進んでからである。このような留学対象国を選択することまで簡単ではない時に，国内の生活がたとえ不況下でも日本の生活がかつて無く快適になったとすると，留学を選ばない若者層が輩出するのは無理からぬことであろう。かつては和魂洋才と叫んだが，技術は教えるほど学んでしまったし，交流・交渉のために必要な英語を学ぶためなら，安価にネイティヴ・スピーカーが来日してくれる時代である。柔道や空手を伝えようとしても，あちらから学びにやってきてくれるのだ。

このように見てくると，日本の「内向き症候群」の問題点は欧米型よりも少し複雑な様相を帯びていることが分かる。欧米の植民地時代に資本主義的市場としての欧米からの渡来に対して留学と言う形で答え，自らもアジア・アフリカ諸国に又，環太平洋世界に“雄飛”しようとした近代の終焉と共に，帝国主義ではない純経済的問題や文化交流としての進出は“手本”に欠けると言う問題がある。その上，東京裁判以来両目を開いて自国の歴史を検証しないでいる内に，日本の特にアジア進出は実は侵略ではないかと疑われる気遣いが固定してしまった。中国や韓国，北朝鮮までが貿易の名の下に世界の発展に争って貢献しているのに，日本産業がトップ・

セールスに踏み出せないのは一つにその為である。この点を見れば「内向き」であるのは，何も若者だけではなく，戦無派と呼ばれた親の代も海外進出はおっかなびっくりの面があったのだ。それでも，その祖父の時代日本が敗戦処理から立ち上がる必要のあったころ，十分なストックがそろわなかった頃までは多くの留学生が存在したことから，日本人が本来的に「内向き」であったとは言い難い。

事実，現実的に今でも日本人は外に出ている。先ずは安い労働力を求めて日本の企業が海外に工場等を移すので必然的に海外駐在員が増える。ただし，かつて安い商品を売ろうとして先進国に出たのとは方向が変わっている。また，以前にはほとんど無かったことだが，特にスポーツの分野で海外チームで活躍する選手が出ている。また，日本人や日系の作家も海外で活躍するようになった。何よりも先回確認したように，学位をとる留学が若い人々の間では増えているのである。確かにかつては単に語学留学であったり，短期文化留学であったものが，単位取得のためとなれば，誰でもと言うわけにはいかないから人数が減ったと思われるかもしれないが，内容を深めて留学が続いていることは現実である。

そして最後に，確実に増えているのが女性の留学，海外での就職である。かつては皇太子と女性は大変貴重なものであるから，海外に出してはならないと言われた。だが，今や国内にいれば何とか職を得，昇進することの出来た男性に対して，男女雇用機会均等法の枠組みだけでは飽き足らぬ女性達，或いは，学位でも取らなくては男性に同等とは認められない女性研究者達が海外を目指す。

このようなわけで，先回に続き，インタビューをお願いするのは女性として留学なさった大先輩である。しかも，外国でM.A.およびPh.D.を取得なさった上先生の体験を伺いたいと思います。どうぞ，宜しくお願いします。

Q1：先生の現在の専門は何ですか？　専門外の人間の為にも，少し詳しく教えてください。

生成文法による統語論に興味を持ってきました。生成文法というのは，今から50年ほど前にアメリカのチョムスキーという言語学者によって提唱された文法理論です。私達は生まれてから誰でも母語を持っており，その母語を自由にあやつることことができます。生成文法ではこの母語話者が持っている言語能力は母語話者の脳に内蔵された知識であると考えるのです。そしてこの脳に存在すると考えられ母語話者の言語能力とはどのようなものなのかを解明しようとするのを一つの目標にかかげています。更に，生成文法は，子供は生まれ育った社会の言語ならどの言語でも何の苦労もなく短期間に習得できるという事実に目を向け，言語習得のメカニズムを解明することをもう一つの大きな目標にしています。生成文法では言語習得は模倣によるものとは考えられないとし，子供がどの言語でも獲得できるのは，表面上の違いにもかかわらずどの言語にも共通に見られる属性があると考え，これが言語習得を可能にしていると考えられています。このメカニズムを普遍文法と呼び，人間に遺伝により生得的にあたえられていると仮定し，この普遍文法の解明を目指しています。

ことばに個別性と普遍性があることは勿論これまでにも論じられてきましたが，個別言語は母語話者の脳に存在する言語知識であり，普遍性は人間だけが遺伝によって与えられて持って生まれてくることばの仕組みであると考える点で言語理論としては新しい展開となったわけです。

私は，文をつくる仕組みがどのようなものであるかということを考える統語論に関心を持っています。いくつかの語を並べて文を作りますが，そこには目に見えないのですが抽象的な構造が潜んでおり，どのような法則，原理によって文の構造がつくられるのか，英語の構造分析を行い，個別言語としての英語の姿をより理解するとともに，日本語との比較にも目を向

け少しでも人間の言語の普遍性という側面も探っていきたいとこれまで研究してきました。

Q2：学部まではどんな勉強をしていましたか？　どんな勉強法をとっていましたか？　サークルに所属していましたか？　趣味は何ですか？

実は私は，高校までは理数系の科目のほうが好きだったのですが，当時理数系に進学する女子はとても少なかったのと英語も大変好きだったものですから，結局英文科に進みました。従って一年の時から専攻は文学ではなく英語学に進もうと決めていました。大学ではミッショナリーの先生を中心にアメリカの学生を教えるのと同じような方式で授業が行われていましたので，テキストもかなり原書を用い，相当量のリーディングもさせられ結構勉強させられました。でもこれが，留学した時には少し助けになったのは事実です。

ただ，私は授業よりクラブ活動に没頭してあまりいい学生ではありませんでした。ひょんなことからESSに入り，3・4年はESSのディベイトの準備，勉強にあけくれていました。

合研：ディベイトがお好きだったのですね。先生の外観からは，失礼ながらとてもそのようにはお見受けしないのですが…

先生：いいえ，私は，議論を，しかも人前ですることはとても苦手で好きではありません。ただ，当時ESSの活動はスピーチよりディベイトが中心で大学間のディベイトの試合が大流行だったのです。それと，私自身はディベイトのトピックについてリサーチし，賛成，反対の立場をしっかり根拠づけて相手を説得できるよう論を組み立てていく準備過程，その勉強が面白かったのです。英米の法律や刑事法なども随分勉強したんですよ。

ディベイト試合では，英語のうまい弁のたつメンバーが中心に活躍してくれ，私は最低限の役割しか果たせませんでしたが。

趣味は庭いじりで，タイガース・フアンです。お習字が好きですし，韓国ドラマも好きです。

Q3：何時，どの様にして留学を決心しましたか？　留学先はどちらの国でしたか？

先生：留学は二度しました。一度目は，母校の先生から奨学制度があるから行ってみないかと進められ大学卒業時 1966 年から 1968 年まで，二度目は 1980 年から 82 年までです。双方，米国のミシガン大学大学院です。最初の留学時には一ドルが 360 円だったのですよ。

Q4：その頃，どれほどの英語力がありましたか？　どの様な英語力かも教えてください。

先生：TOFEL と大学院入学のための GRE（Graduate Record Exam.）を受けました。昔のことで忘れてしまったのですが，TOEFL は 500 か 550 点以上を取るようにといわれて，ぎりぎりだったと思います。足りなければ，英語の科目をとることで補ってくれるようにもなっていたようです。今はミシガンは 620 点以上とのことです。GRE は難しくて得意だった数学も出来ませんでした。一生のうちで最悪の点を取ったと思います。数学でロジックを読み解く能力を見たようです。これは大切なことですね。数字であっても言葉であっても同じことです。でも英語で，でしたからお手上げでした。

合研：近頃 IELTS の内容が変わったとか聞きましたが？

先生：書くことが重視されているんではないでしょうか。日本からの留学生は，特に書くことが苦手のようです。私は高校，大学でもっと英作文，writing の訓練をすべきだと常日頃思っているのですが。

Q5：留学先（国・大学・専攻）を選ぶ上でのポイントは何でしたか？どんな苦労がありましたか？

先生：先にお話したように，恩師がミシガン大学の Pi Beta Phi という sorority の奨学生として推薦してくださったものですから大変幸運だったと思います。1960 年代の日本ではまだまだ私費留学は手の届くところにはありませんでした。しかも，ミシガン大学は当時言語学プログラムではアメリカの大学の中でも評価の高い大学でしたので，私の興味からもとてもラッキーだったと思います。

行ってみると，ミシガン大学は学生数は約二万人のうちその半分以上が院生ということでびっくりしました。

Q6：どんな学位をとりましたか？

先生：M.A. in Linguistics と Ph.D.in Linguistics です。

Q7：Ph.D. の研究テーマはなんでしたか？ それを選んだ理由は何ですか？

先生：1982 年に取得しましたが，“Crossing Constraints in Japanese Syntax” というタイトルの論文です。生成文法理論は，当時，個別言語としての英語の研究分析から普遍文法へ目が向けられていた時期で，言語の仕組みには全ての人間の言語が満たすべき法則，あるいは逆に人間の言語

にはありえない制約といったものがあるのではないかという研究が盛んに行われていたのです。それで，指導教官のアドヴァイスもあり，類型的に全く異なる日本語を取り上げ，英語で提案されている制約が日本語にもあてはまるかを試みたのです。

合研：英語学と言うと英語が対象かと思いましたが，必ずしもそうではないのですね。

先生：勿論，英語学というのは英語を対象とします。ただ，生成文法では人間言語の普遍的特性の解明をめざして出現したものですから，言語間に存在する共通性や実際に存在する言語間の差異の問題も重要な研究対象になります。そしてその場合，やはり直観が働く母語を対象にするということになるのです。英語の仕組みを見る時に，日本語や他の言語と比較することによって英語の本質的な姿がより分かることにもなります。

合研：英語学は海外学位の方が役に立ちますか。

先生：何に役に立つかによりますが，海外で学位をとる場合は最新の理論的枠組みで書けるチャンスが大きいため，学位取得後海外で一時期何らかの形で職を得て，その後日本の大学に職を得て帰国するという若い研究者のケースが見られますので，有利な面があるとも言えるかもしれませんね。

Q8：将来のテーマは何ですか？ライフ・ワークになるものはありますか？

先生：これまで英語の文の構造を中心に研究をしてきましたが，最近はずっと文の構造には動詞，動詞の持つ情報が大きく関わっていることに興味を持ってきているものですから，これからも細々とではありますが，動詞の

色々の諸相についての研究を続けていきたいと思っています。それと同時に，後継者を育てるというと大袈裟ですが，後進を育てたいと思っています。英語話者の直観というものは私達が決して習い学ぶことができるようなものではありませんが，これまでの文法研究を見ていくことから英語に対する直観の手がかりになるような言語現象を学生に伝えていきたいなと思っております。何人かの学生がくいついてくれるととても嬉しいですから。

Q9：留学先でと日本での研究方法と指導法に違いはありますか？　どの様なものですか？

先生：図書館が整備していました。普段は夜中まで開いていましたし，試験期間中は学部生用の図書館はオールナイトでしたので，私は勉強は全部図書館でしました。また授業ではどの科目でも沢山の reading assignment がだされるのですが，その指定図書が科目ごとにおいて並べてある図書室があり，いちいち検索して出してもらわなくても自由にそこで読めるようになっていましたし，博士課程の学生には carrel といって個室がありましたので，本はそこにおいていつでも勉強できるようになっていましたのでとても助かりました。

合研：それはいいですね。部屋を予約できれば，静かに研究が出来るだけでなく，文献をそのまま館外に持ち出さずに，その部屋において置けるわけですね。龍大の特に大宮図書館は他のものと比べて，閲覧スペースが充実していますが，さすがそこまでは行きません。閉架書庫は貴重な文献がそろっていてよいのですが，借り出さないとゆっくり閲覧する場所が無く，文献を選ぶのに手間と時間が掛かります。

先生:指導も，特に，留学生に対しても，きちんとして下さる先生が多かったと思います。多くの教員がキャンパス内に住んでおられましたので，教員宅でパーティ等も開いて下さいました。私は幸運にも相性がうまくあったのか指導教員の先生（当時とても活躍してられた言語学者なのですが）には厳しいながらもとても親身になって指導をしていただけて本当に有り難かったです。当初は博論を仕上げられるとは夢にも思ってなかったのですが，理論はどんどん変わって発展していくので延ばせば余計に大変になるし，帰国すれば大学の用事などで忙しくなるだろうからとにかく頑張って書き上げるよう励まされました。夜間に研究上で困ったことがあり訪ねた事も何度かありましたが，“This is my job.”と快く対応して下さったのには感動しました。

Q 10：留学先で，オフタイムには何をしていらっしゃいましたか？　今はどうですか？

先生：始めの時にはアメリカが物珍しく，あちらで出来た友人に誘われるままどこにでもついていきました。ただ一学期目は授業についていくのに精一杯でそんなに余裕はありませんでしたが。クリスマスやイースターなどの休みの時には，必ず誰かが家に招いてくれましたので，アメリカの家庭を見る機会に恵まれました。この時の友人数名とは今でも交流が続いています。しかし，二度目の時はほぼ文字通り授業以外は図書館とアパートの行き来だけの生活でした。この時ほど机に向かっていた時期は私の人生の中でなかったです。

Q 11：研究の成果は社会の役に立っていますか？　かつて，文学は社会に即役に立たない，時には反社会的であることを誇りに思っていましたが，

先生の場合はいかがですか？

先生：直接社会に役立つことは少ないと思います。現在の言語学／英語学は言語を科学的にとらえようとしています。従って，単に発話のデータを分類しまとめるだけでなく，いかに論理的に組み立て，そのデータを超えた検証可能な予測ができるか，いかに説明力を持つかが重要になってきますので，こういう点を演習，卒論作成などで学んでいくことは，社会に出た時にも有用な基礎的技術を身につけられるのではないかと思います。近年，情報処理の問題，情報の信憑性や整合性などのチェックなどますます重要になってきています。従来の人文学としての言語学とは違う言語研究の科学的側面を学んでくれればと思います。

Q 12：留学先ではどちらにお住まいでしたか？それはどの様なところですか？　生活一般についてお教えいただければ，有難いのですが。

先生：先に言いましたように，始めは sorority という 50 名程度のちょっと特殊な女子寮にゲストとして受け入れてもらいましたのでとても雰囲気のいい快適な生活でした。成績を含め家庭環境，人柄など面接審査をへて同じ志を持つ女子学生が一つのハウスで生活するという組織で成り立っているようでした。

二度目は，大学のサバティカルを利用して行きました。当時は一ドルが 220 円になっていましたし，外貨持ち出し規制もありませんでした。住まいは一つのハウスを何人かでシェアー，キッチンなどは共用という典型的な学生の生活スタイルです。最初はドイツや韓国からの留学生と一緒，次の年はアメリカ人の学生とシェアーしました。私は学生の身分で留学する場合は，寮にすむとかハウスをシェアーするというようにできるだけ現地の学生との接触がある形のほうがいいと思っています。煩わしいこともあ

りますが，友人もつくれるし，時には grocery shopping も一緒にしたりと楽しい経験のほうが多いように思います。

合研：院生には留学生がいましたか。また，移民などいわゆるＷＡＳＰでない院生の割合はどのくらいでしたか。

先生：ミシガン大学はとても international な大学で世界中の国々から沢山留学生が来ていました。私の属していた言語学科では三分の一以上が留学生だったと思います。

Q 13：私費留学をどの様に考えられますか？

先生：目的を明確に持てばよいのではないでしょうか。日本の経済力が増すにつれてスカラシップ源は小さくなっていますから，最近は奨学金をもらって留学するというのが非常に厳しい状態になっていますので。特にアメリカの大きな大学は授業料が非常に高くなっているようで，ミシガン大学も以前から比べると倍以上して今は州外出身者（out of state students）は 37,000 ドル（in-state は 13,000 ドル）の高額ですから私費留学は経済的に極めて難しいです。龍大は留学に対しても支援があるようで恵まれていると思いますので，協定校などを活用して是非チャレンジしてほしいと思います。生活費は勿論場所にもよりますが，贅沢しなければ結構きりつめられると思います。私の時でも一部屋だけを借りる場合は 100 ドル以下で十分ありましたし，夏などは sublet といって 40 ー 50 ドルで借りましたから。

ただ，単に留学をすると何かが変わるのではないかという現状打破派，うまくいってない現状を変える安易な手だてとしての留学というのには賛成できません。メリットが少ないと思います。

Q 14:近来年少児の留学が短期・長期にかかわらず盛んですが，賛成でしょうか？

先生：日本人は10年も英語を習っているのにろくなコミュニケーションができない，だから小さい時に留学させればいいとか早期英語教育をすればいいという考えは実に短絡的な考えだと思います。小学校で英語の歌を歌ったり，小学生の時に留学したからといって，そこで身につくものが，果たして，後年どんな役に立つのでしょうか？　とても疑問に思います。

　コミュニケーションができるには自分の思っていることを文に組み立てていくことができること，そして相手が組み立てた文の構造をひもといて理解できること，この基本的な能力がまず不可欠だと思います。早期留学より，まず母語でのこの能力を磨くべきです。

合研：私の故国，中国では小学生の留学への反対運動があります。

先生：日本だけでなく，教育熱は時に危うい方向に向くことがあるのですね。

合研：留学生の「日本語教育」に，留学の体験を踏まえて何か御意見がありますか。この頃は，先ずは日本文化を教えてからとかいろいろな意見がありますが，先生はアメリカ文化をどの位学んで留学なさいましたか。

先生：私は留学にあたってアメリカ文化について特に勉強はしませんでした。むしろ，留学してアメリカ文化についても一生懸命吸収して帰ろうと思っていました。ところが留学してつくづく感じたことは，自国の文化に立脚してこそ外の文化を深く理解することができるということです。留学先の国のことよりも，まず自分の国の歴史や文化についてよく学んでいく

ことのほうがずっと大切だと思います。

Q 15：現在の院生に何かアドヴァイスをいただけますか？

先生：私は龍大は院生に対する奨学金などによる支援はとても充実していると思います。従って，この恵まれた環境を最大限に生かし，自分が興味を持ったことはとことん深く追求していく意欲を持って院生活を送ってほしいですね。英米文学，カルチャー，英語学いずれの分野にしろ，出来るだけ多く原書に馴染んでしっかりテキストを読むことに努力してほしいです。母語でないので努力が要ります。大変ですが，継続は力なりです，真面目にやれば気がつくと読解力がついていますよ。　そして是非，留学，院への留学にもチャレンジしてほしいです。

合研：英語学と言えば英語で英語を学ぶのかと思っていましたが，母語の分析をすると言うことで安心しました。ところが，結局英語に戻ったわけですね。原書を読むこと，書くことに力を入れること，論理的思考力を高めることと，留学以前の心得をたくさん学びました。有難うございます。

女性の海外進出といえば，明治維新時の津田梅子や，二次大戦以前からの“唐行きさん”もあって，新しいことではない。英国で，余った女達を植民地に送る運動があったが，女性を海外に捨てることは往々にして行われてきたのだ。だが，それを逆手にとって雄飛する女性がいるのも事実である。

また，前回の河野先生は御結婚によって海外に出られたことを好機として学位を取られた。今回の上先生は恩師からの推薦を得て奨学金で留学なさったと言うことで，双方誰にでも出来ることではない。しかし，与えられた機会を活用して有用な知識を身につけるのは，ある意味で女性らしい

しなやかさがあってこそと言えるであろう。

「内向き」と呼ばれる若者達も，もしそれが内容の充実に関心を移した表れであって，必要とあればその確かな実力を持って海外の人々と交流し交渉することが出来るのであれば喜ばしいことである。思い起こせは現在“日本的”と言われる多くのものが江戸時代の鎖国期に洗練され整備され大成されたものが多い。鎖国の後に来た開国期の異文化との遭遇で大きく飛躍できる力と技を醸成させていたわけだが，現在の状況も，第二の開国期を迎えようという時，果たしてそのようなものなのだろうか。海外での二学位の取得を淡々と語る上先生を前に，院生達は思いを深くしました。

上先生貴重な御意見を有難うございました。

(2010年2月6日リーガ・ロイヤルホテル，コルベーユにて)